

# 法 勞 を 謝 す

同 学 林 是 幹

学頭里見泰穂教授が本年古稀を迎えて、学園内外の祝賀を受けられ、「棲神」誌が、古稀記念号として刊行されることは、教授はもとより関係者一同の大きな喜びである。教授は対島中学の出身で、昭和二年春、立正大学予科に入学、以来谷山に研鑽を積むこと十年、仏教学科を卒業して更に研究科を修学された。昭和十五年春偶々身延の新教頭に就任の片山先生の徳懃を受けて祖山学院教授として勤務するに至った、祖山学院は翌十六年に多年の要望が実現して、身延山専門学校として新発足するに至り、正に師徒一体となつて学校発展に努力邁進の氣運に充ちていた。教授も終戦前の短期間召集を受けたが、間も無く無事に学園に戻ったことは幸いであつた。爾来今日迄四十余年の永きに亘つて本学発展のために尽粹された。願みて本学の今日迄の歩みを考えると逢着した幾多の障碍や困難が偲ばれる。里見教授が年と共に次第に責任の立場に関係するに伴い、好むと好まざるとを問はず種々の困難、制約を打開しなければならなかつた。教授が寺を持たない、従つて法務、寺用に煩はされずに教育に専念出来たことは忘れてはならない。又忍耐強く頑張つて周囲と余り摩擦を起さずに、局面の打開を図つたと云ふことも教授の特長として数えられると思ふ。所謂前時代生き残りの古つわもの間に伍して、次第次第に学校の旧体制を改善して来たとも言へる。教授が多数の宗門子弟を育成した功績は勿論言を俟たない、同時に本学の基礎確立に、内容の充実に今日迄払はれた労苦は甚大なものがあり、里見教授なればこそ具体化され、実現されたと見る幾多の成果を決して忘れてはならないと思ふ。

教授は決して頑健と云ふべきではないが、所謂柳に風折れなしの健康状態である、且つ平素摂生に努められているが、古稀を期して更に一層自愛されて寿を重ね、背骨を伸ばし氣力を充盈し、愈々学園伸展の爲めに努力されんことを念じ、併せて慶祝の意を表する次第である。